

日本スポーツ社会学会だより

第7号

1994.3.1.

I. 諸報告

1. 1993年度第1回日本スポーツ社会学会理事会報告

II. 研究通信

1. 『ジャパニーズ・フットボール』

2. 『近代以前における日本人の「ナンバ」歩行技法のルーツを求めて』

3. 『サイボーグ・アスレチックス』

4. 『GLOBALIZATIONをめぐってー北米スポーツ社会学会報告ー』

III. 国際学会情報

IV. 寄贈図書

V. 会員異動

発行 日本スポーツ社会学会事務局

〒305 つくば市天王台1-1-1

筑波大学体育科学系 スポーツ社会学研究室内

Tel./Fax. 0298-53-6371

振込口座 日本スポーツ社会学会事務局

宇都宮 9-43962

I. 諸報告

1. 1993年度第1回日本スポーツ社会学会理事会報告

井上、池井、伊藤、今村、江刺、松村、山口の各理事が出席して、1993年11月17日に行われた。会議録は、以下の通り。

(1) 第3回学会大会について

先に通知された学会大会の内容などの細部について若干の質疑が提出されたが、立案者の影山氏（研究担当理事）が欠席されたので回答は保留された。これについては、今村（研究担当理事）が影山氏と打ち合わせの上、質疑に対する回答を明らかにし、研究担当理事全員の了解を得た後に、理事全員に文書で諮る事とした。（文責：今村）

(2) 会則改正について（松村報告）

1) 学生会員廃止の件については、続ける事に決定。

「購読会員」を新設する。個人・機関 3,000円/年

2) 第5章 会議 第13条2を削除する事に決定。

3) 役員選出細則の第5条の「選挙管理委員会は、・・・都道府県で表記する。」の部分を削除。

以上、理事会で決定したので、本会議に原案として提出する。

(3) 『スポーツ社会学研究 第2巻』の編集に関して（江刺報告）

1) 編集委員長として江刺委員を指名した。

2) 投稿希望者は8名で、6名が論文を提出した。

3) 特集「身体文化の社会学」を組み、J. ホーン氏と平野会員に論文を依頼、快諾を得た。

4) 論文批評の欄を設け、平井会員（米国の論文）、菊会員（英国）にそれぞれ寄稿を依頼し、快諾を得た。

5) 会員の研究業績リストを受け付けている。昨年と同じ程度の量になりそう。

6) 11月20日に第3回の編集委員会を開催予定。

(4) 学会財政基盤の確立をめざす件（松村報告）

1) 購読会員を積極的に募ることを合意。（体育学会中にチラシを配布する。）

2) 全国の大学図書館に向けてPRをすることに決定。作業は事務局が行う。

(5) 学術団体登録の件

伊藤理事・松村が担当する。

(6) アジア・スポーツ社会学会設立に関して

詳しい報告が佐伯理事よりなされてから、検討する。
時期的に急ぐ必要があるならば、理事の間で資料を送付し、意見を求める。経済的な援助を日本に求めているのかなどの疑問が出た。

(7) 共同プロジェクトに関連して

プロジェクトを結成し、科研費の申請をする方向で基本的に合意する。今村理事を中心としてテーマを取りまとめ、検討する事で一致した。

(8) 第4回(1994年度)学会大会に関して

千葉大学が開催を引き受ける用意があると報告された。

その他

- ・学会大会のレジュメ集を作る件：参加費を値上げして実施する方向で検討する。
- ・財政基盤確立のための学会誌への「広告」の掲載は見合わせる。そのかわり、積極的に研究誌をPRしていく事を確認した。

☆財政基盤が脆弱なので、その点を抜本的に考える必要がある。次号より、この『学会だより』に出版社のPRを載せることに決定した。(3社内定、1社支援内定)さらに諸会員の御尽力で学会誌を購入する図書館が漸増してきています。この場をおかりして会員の皆様の御協力に感謝いたします。50大学の図書館が「購読会員」になっていただければ、会費の値上げは必要ありません。

(文責：松村 事務局担当)

II. 研究通信

【ジャパニーズ・フットボール】

日本では「アメリカンフットボール」と呼ばれているこの競技(以下フットボールと呼ぶ)の歴史は1869年11月6日米国でプリンストンとラトガースが初の大学対抗戦を行ったことに始まるとされる。米国ではフットボールは伝統的に学生のスポーツであるが、現在では大きく分けてNFL(National Football League)と呼ばれるプロ、そして大学および高校のそれぞれのレベルで異なるルールの下に競技が行われている。筆者は過去10年間ほぼ毎年全米大学体育連盟(NCAA)のフットボール・ルール会議に日本を代表して出席する機会に恵まれており、ここでは毎年行われるルール変更の舞台裏から、この競技に関する日米の文化的相違および構造的相違について考えてみたい。なお、以下はNCAAのルールのみ話題を限定することをはじめにお断りしておきたい。

フットボールはルールが難解なうえ毎年ルールが変わるからわかりにくいという批判をよく耳にする。けれども実はそこにこそ常に前進を求めるアメリカ的な考え方が見られるのである。毎年行われるルール変更では次の7つの基準(check points)により検討が行われる。

1. 競技を行う選手にとって安全でなければならない。
2. 全ての学校に適用できるものでなければならない。
3. コーチ可能なルールでなければならない。
4. 審判によって管理運営が可能なルールでなければならない。
5. 攻撃と守備とのバランスを維持しなければならない。
6. 観客にとっておもしろいものでなければならない。
7. 経済的負担が大きい実施不可能なものであってはならない。

(以下、重要度順)

次にルール(変更)会議は投票権をもつ13名のルール委員(議長を含む)および議長が招待した関係各団体の代表により構成される。13名のルール委員は大規模校から小規模校まで片寄らず選出されるが、それぞれが利益代表としてではなく上記の基準の下に全体の繁栄を考えて会議に参加することが要求されている。これら最終投票権をもつルール委員に加えて、招待メンバーである関係各団体の代表が会議に参加し、発言と予備投票への参加が許される。各団体とはコーチ協会、審判協会、大学コミッショナー協会、トレーナー協会、医事委員会の代表、(NCAAのルールを採用している州の)高校連盟、筆者を含む海外からの代表、それに加えてルールの異なるプロおよび高校の代表である。

議案は予め各団体でアンケート調査された結果を代表が持ち寄り白熱した討議が展開されるが、議長の見事な議事運営により本会議の丸2日間の時間内に議決されるのである。

このような会議の中でこの2、3年は日本の状況について説明をする機会を与えられている。その場合に必ず述べなければ誤解を招くと思われる日米の相違、つまり構造的・文化的相違がいくつかあるので、ここにご紹介したい。

第1はシーズンの違いである。米国NCAAの場合、フットボールは秋に限定されており、シーズン前の練習についても厳しく規定されている。それ以外の時期は春の短期間を除きチームとしての練習は禁じられている。高校についても同様の規定があり、日米間で交流を行う場合、州の体育連盟により特例が認められるかが常に問題となる。このシーズン制は中学、高校、大学の各レベルで一つの競技を選べば他の競技を選ぶことが不可能に近い日本との大きな違いである。一つの競技に集中することにより技術の発達が望まれる半面、負傷と治療という観点からはシーズンが限定される方が望ましいであろう。

第2は設備の違いである。まず日本ではごく少数の恵まれたチームを除き、練習や試合は土のグラウンドで行われる。どんな田舎の高校でもスタンド付きの芝生のグラウンドがあり、電光掲示板がある米国との大きな違いである。激しいタックルとブロックが繰り返されるフットボールにおいては根本的に異なる側面である。高校と大学のフットボールを日本で競技し、審判を日米両国で経験した筆者には、この点において日本で競技されている「アメリカンフットボール」が米国のフットボールとは全く別の競技のように感じられる。ちなみに天然芝と人工芝との安全性の違いについては、上記のルール委員会で小委員会が任命され調査中であるが、科学的に有為な差は今のところ報告されていない。

第3はユニフォームと装具の供給である。アメリカでは高校を含め学校側が供給（貸与）するのがあたりまえであるが、日本の場合はごく一部を除き個人で買わなければならないというのが高校・大学を通じて共通である。

第4はコーチと審判である。両者を同時に語ることは無理があるが、敢えてまとめると日本の場合両者とも無給、よく言えば全員「ボランティア」であるということである。まずコーチについては、米国でも高校の場合は多くは教師がコーチを兼ねるが有給つまりコーチングに対する手当がつく。最近の経済事情のためアシスタント・コーチの数を減らす傾向がありボランティアも増えていると聞くが、各校とも主たるコーチは有給である。大学の場合大規模校で専任のコーチング・スタッフが雇われ、強豪チームのヘッドコーチ（日本の「監督」にあたる）は学長なみの社会経済的地位をもつといわれているが、小規模校の場合教員と兼任であることが多い。どのレベルにせよ、チームには必ずコーチがつきコーチには相応の報酬が支払われる。審判も交通費以外に各レベルに応じて報酬が与えられる。

日本では経験者がまだ少なく世間からの注目度も低いが、米国でコーチングが充実している背景には前述したシーズン制、つまりコーチをするのが2、3ヶ月という比較的短期間に限定されているという事情がある。それに加えて日本と異なり教員以外でも放課後に時間を作り練習を見られるという就業面での事情がある。たとえばある高校のコーチは市の職員であるが、朝早く出勤して放課後には仕事が終わってグラウンドに行けるようにしているという。

一般にお金が絡むと人間関係もせちがらくなる。コーチも審判もボランティアである日本と異なり、米国ではコーチと審判との仲は必ずしも良くない。試合中、コーチはルールに触れない範囲で審判に対してアピールを繰り返す。侮辱的な言動は罰則を科せられるが、ギリギリの線で審判に迫ってくるのが一般的である。コーチ歴よりも審判歴の長い筆者にとっては、それが単に審判へのアピールだけではなく自分のチームのメンバーや観客へのアピールでもあるかのようにさえ感じられることがある。黙っていれば「黙認している」と解釈されかねない米国社会では、自らに不利な判定に対しての異議を派手なジェスチャーを含め大げさにアピールすることが自分の立場を守るための死活問題なのである。「以心伝心」や「武士の情け」が尊ばれる日本との文化的・経済的相違とも解釈できる。

第5は運営面での相違である。高校・大学とも各校には体育局長（athletic director）と呼ばれる人がいて運営に当たる。前述のシーズンや設備とも大いに関わるが、ホームチームとビジターの間で行われるのが、アメリカの学校スポーツの基本的スタイルである。従って会場捜しの必要がなく、各校の体育局長がスケジュール作成から審判の手配、入場券の販売等、試合の運営すべてを取り仕切る。高校の顧問の先生がコーチと審判、さらに運営上の責任を負うことがあたりまえの日本の事情とは大いに異なる点である。

第6はアマチュアリズムである。数年前に来日したNCAAフットボール・ルール委員会の大御所故デイビッド・ネルソン氏は「アメリカが失ってしまったアマチュアリズムを日本のフットボールが維持している」と評した。ピック・ビジネスと化したアメリカの大学フットボールを見続けてきた同氏の目には、日本にはまだ素

朴なアマチュアの精神が脈々と息づいていると映ったのかもしれない。

このように考えると、日本における「アメリカンフットボール」と米国のフットボールはルールは同じでも、それを取り巻く環境、つまり構造的、社会的、経済的、文化的背景が全く異なるといっても過言ではない。アメリカ人から見れば我々の「フットボール」は「アメリカンフットボール」ではなく「ジャパニーズフットボール」なのかもしれない。けれどもこれはどちらが良いか悪いかの問題ではなく「相違点」なのである。ホワイティングによれば「日本人は野球も武道にしよう」そうであるが、野球に全く無知な筆者にとっては日本の「野球」と米国の「ベースボール」が本質的にどう異なるかはわからない。けれどもこれらの「相違点」にこそ、筆者が関わる「スポーツ社会学」の出発点を見いだしたいと考えている。

東元 春夫（芦屋大学）

『近代以前における日本人の「ナンバ」歩行技法のルーツを求めて』

近代以前の日本人は「ナンバ」による身体の捌きによって歩いていたという。歩くという人間の基本的な行動様式でさえ、近代様式という社会的な記号によって身体そのものも変化していった。そこにはどの様な力が働いたのか。それにしても、現在のわれわれにとっては、右足と右手を同時に出して歩く「ナンバ」歩きを当時の日本人がしていたとは考えにくい。そのルーツはどこにあるのか。どうしても知りたい。以下、年末の東京での「ナンバ」おたくぶりを記してみる。

平成5年の師走、スポーツ産業学会法学会専門分科会・スポーツ法学の両学会が12月17日・18日と東京で開催された。その出席を機会に、東京の恵比寿にある防衛研究所で、西南戦役後当時の鎮台兵の訓練をしたとされる「上毛大演習」を探るべく1週間程東京（東京一下関間の往復切符有効期限）に滞在し、「ナンバ」による歩行様式を突き止めるために12月16日に出発した。

昨年の本学会で近代移行期の身体技法の特性として「ナンバ」の身のこなしを取り上げて以来、どうもこの身体技法が気になって仕方がない。本当に近世のそれまでの日本人は「ナンバ」様式で歩いていたのか。なんとかしてその証拠を探りたい。近代まで日本人は右足を前に出すときに右手も同時に出して歩く「ナンバ」歩行をしていた、とされている。もう、15年も前、スポーツ風土論を考えているときに、人類学の関係の本で読んだことがある。その時はそうなのか程度で、それほどの関心はなかった。

その後、「ナンバ」との出会いは、身体論が盛んに出回るようになり、野村雅一氏の「しぐさの世界」と出会ってからである。野村氏とは、山口昌男氏（文化人類学専攻）が主催する東京外大A・A言語文化研究所の「象徴と世界観の研究プロジェクト」で一緒に、近代の身体技法についてお聞きしたことがある。武智鉄二から引用して、「ナンバ」で歩いていた日本人を、近代の反動系による歩きかたに変えるために明治の軍隊は大変な苦勞をしたと野村氏はいふ。学校教育に行進を取り入れたのもそのためだと。近代の身体様式を一変させたのである。

マルセル・モースの身体技法（モースは身体技法を同時に、生理的、技術的、社

会的、文化的、な観点から考察すること、かれ一流の言葉をもちいれば、「全体的社会的事象」としてとらえる必要を説いている。)に焦点化してみると、日本の近代における身体技法は、「ナンバ」系から反動系にかわる歩行様式にその特性をみることができる。しかし、近世の日本人が「ナンバ」スタイルで歩き、走っていたというのは真実だろうか。文献ではそういわれているのだがどうもそう思えない。

12月16日に下関を出発。山口昌男氏主催の「テニス山口組」の打ち上げがあると聞いていたので、16日の夜、東京府中のその会合に出向いた。そこで山口氏から、この機会とばかりに、「ナンバ」歩きについて書いておられた河野亮仙氏の住所を聞いてみた。「ええと、河野亮仙は早稲田大のドラマカンの森尻さんが知っている。」と、さっそく手帳を開いて森尻さんの電話番号を教えて下さった。この会はその後山口氏の御自宅へ押しかけて賑やかなものとなったが、残念ながらまたしても山口氏からは「ナンバ」について聞き出すことができなかつた。しかし、「ナンバ」についての研究者を知る手掛かりはできた。河野亮仙氏が、「民族音楽叢書9」(東京書籍、1990年)の「舞踊と武術」—アジアの身体文化—のなかで、「ナンバ」について書いているのを知ったのは、昨年8月下旬である。山口氏が、廃校になった小学校を借受け、年に何回かこれを利用してイベントを仕掛けている福島県昭和村の「喰丸文化再学習センター」での夏季講習会に参加した時に、山口文庫をあたっていて偶然これを見つけることができた。そこに1万冊の蔵書を山口氏は移している。講習会が終わって後、5日間この廃校校舎に一人で寝泊まりして、片っ端から山口文庫を探ったのを思い出す。

河野亮仙氏は、「ナンバ」について次のようにいう。「ナンバ」の謂われについては、昨年スポーツ学会で発表した武智鉄二から多くを引用しているので割愛するが、インドあるいはアジアのいたるところでの武術と舞踊のあいだに強い結びつきがあり、「なんば捌き」として「ナンバ」の身体人類学の方へも発展させ、日本人の農耕民族説はこじつけであり、むしろ、山がちな国に住む民族の歩法との関連から導き出すことを進めている。教育を受けていない田舎のチベット人は、今でも右半身前、左半身前という歩きかたをし、これが山がちな国に住む人の歩きかたで、本来の日本人の歩きかたに近いだろうという。

取り敢えず、早稲田銅鑼魔館の森尻純夫氏に会うことであつた。12月17・18日の学会を経て、森尻氏に連絡が付いたのが12月20日になってからだった。森尻氏は「ナンバ」のことを研究するならば、芸能の研究をする必要があるという。なにはともあれ、森尻氏から河野氏の住所を聞き出すことに成功した。早速、河野氏と連絡をとるが帰宅は夜半になるとのことである。それはそうとして、「ナンバ」歩きを徹底して改善したのが近代兵の軍事訓練にあつたとされるならば、何としても木下秀明氏(日本大学教授、体育史)に会っておく必要がある。氏の学校教育における軍事教練の研究資料は前回上京したおりにかなり手にしている。午後2時から4時までなら時間が取れるとのこと。日大の氏の研究室に出向き、早速「ナンバ」歩きによる身体改良のために、学校教育のなかに軍隊行進を採り入れたことを述べた。茨城大の国枝会員から日本体育学会の時に氏の事は聞いていた。国枝会員は「秀明君はそう詳しくは教えてくださらないがこれとこれを調べてはと親切には教

えてくださるわよ。」という。ところがである。「ナンバ」について話しはじめると、木下氏の目がぐーと下を向き徐々に真剣さを増してくる。氏とは学会のときに簡単な自己紹介程度であつたが、もう何年も前から会っていたかのように話が弾んだ。西南戦役後の「上毛大演習」については、恵比寿の「防衛研究所」で丁寧に見ていくか、当時の新聞記事を探すしかないだろうとのこと。それはそれとして「ナンバ」は本当か、の疑問には、浮世絵、錦絵に描いてはあるが、絵はそうあてにならない。そうすると、労働形態を調べるしかないかと示唆を受ける。そのうちに、互いに「ナンバ」の体捌きを身振り手振りによって交わす。木下氏には、森有礼の兵式体操導入、東京高等師範学校初代の校長になぜ当時の軍人を登用したのかについても聞きたかつたのであるが、「ナンバ」の話に終始してしまつた。後日、資料をお渡しすることを約束して、日大をあとにした。

森有礼の兵式体操も「順良・信愛・威重」の3気質を涵養することにあつたが、その後はその精神も何処かに吹き飛んでしまう。洋学派の田中不二麿文部大輔が明治13年3月12日に司法郷に転出させられ、洋学派の生き残りは伊沢修二(明治8年7月米国へ留学し、明治11年10月より東京師範学校の校長補、明治12年3月から明治14年3月まで校長を努めている。賛美歌の曲を導入した文部省小学唱歌と関わっている。)ぐらいといわれている。実は、当時文部省では洋学派と儒教派とのすさまじい闘争が繰り返されており、狂信的儒教派で天皇の侍講である後の「教育勅語」の起草者、元田永孚は、伊藤博文から文部大臣を任命された洋学派の森有礼とは犬猿の間柄である。森が暗殺された翌年1890(明治23年)年10月30日に教育勅語が發布されている。田中が失脚させられて以後森が文部大臣に成ったときにはすでに、元田ら儒教派が文部省の実権を握っており、キリスト教に理解のある森を元田は嫌っていたのであり、そのカモフラージュとして、森は教育界に軍事教育を取り入れたのではないかと、という仮説は考え過ぎであろうか。しかし、そうした疑問をおつけることなく、木下氏とまた、会うことを約束して、宿舎に帰えらざるをえなかつた。

この東京滞在中に唯一会っておきたかつた河野亮仙氏と連絡がとれたのは夜9時頃、しかしながら今回は残念にも日程の都合で会うことができなかつた。氏とは今年の3月中旬に東京でお会いすることにして、東京を後にするしかなかつた。それでも河野氏からは、神田の書泉グランデに「秘伝」という武道・武術の雑誌に甲野善紀氏が「まわさない体捌きとナンバ走り」について書いていることを聞き出せた。これは東京を立つ22日に神田の書泉グランデで手にすることができた。氏は、体をまわさずに使う井術術理を発見し、深夜、順体で走る「ナンバ」走りを稽古していて、この練習を積むと、「何気なく家の中を歩いていて左へ曲がろうとした際、体が『このまま曲がってしまう。まわってはダメだ』とまわる体捌きを拒否したことが分かつたのである。」という。この「ナンバ」に取りつかれてから、歩いたり、走ったり、「ナンバ」の体捌きというか、真似というか身のこなしをしているとある。甲野氏は上体と下体を捻らずに走るというのは相当奇妙な姿に見えるから、昼間走って好奇の目で見られると気持ちも集中できず研究も進まないからである、と述べている。上体と下体が捻じれる西洋的走りよりも素材として未加工であり、研

究と工夫によって大変効率のいい身体運用がおこなえると、ある。それにしても真剣に「ナンバ」の体捌きを訓練している人がいるとは驚きである。なるほど、歌舞伎・能に「ナンバ」の体捌きが入り入れられたように、スポーツの技としても「ナンバ」の身のこなしをハッキリ意識して取り入れることによって、スポーツにおける身体技法が発展するかもしれない。21日、現筑波大の前身の東京師範学校について調べるために筑波へ、ここで清水会員にこれまでの報告と今後の打合せをし、往復切符の期限も22日までということで、22日に東京を発った。

小谷 寛二（国立水産大学校）

【サイボーグ・アスレティックス】

身体をめぐる様々なディスコースにおいて、自然と文化の対立は、そのディスコースの存在理由のみならず、議論の合理性そのものを保証している。その一例として、スポーツの文脈では、体育と知育をめぐるアカデミックなヘゲモニー闘争が、この対立を存在基盤におきながら、同時にそれを道具として展開されていることが挙げられよう。身体と頭脳（「脳まで筋肉」「陸水練」）、健康と病（「健全な精神は健全な肉体に…」「青白きガリベン」）といった副次的なコードは、自然と文化の対立が、この闘争のために道具化されたものなのである。そして、実際、レヴィ＝ストロースによって人間理性を構成する究極の対立とされたこの対立図式によらねば、身体の意味など何ほども語りえないだろう。しかし、ならばこそ、その際、自然が、システムの外部として、文化を不可避に補完していること（あるいはその逆）を忘れてはならない。つまり、通常ありがちな批評が語るような、失われた過去としての「文化なき自然」への憧憬も、来るべき未来としての「自然なき文化」への畏怖も、そもそも論理的に、忌避されなければならないのだ。

この箴言は、構造主義をもちだすまでもなく、デュルケムが犯罪を健全な社会の構成に不可分の要素であると認めた時以来、社会学においてすでに確立されたものであった。すなわち、彼によれば、犯罪という外部は法システムの境界を確立するうえで不可欠であり、それゆえに社会という内部の存在が可能になるのだ。しかし、そうした伝統にもかかわらず、この箴言が実際の語りの中で尊重されることはまれである。そして、われわれは、カール・ルイスという現代のヒーローが、「エレクトロ・エンセファログラフと呼ばれる電気脳波カメラによる精神状態の把握、ストレス・テストやコンピューターグラフィックスによる競技のシュミレーション、スティック・ピクチャーによるフォーム解析、ウェイト・トレーニング・マシンとコンピューターを直結させたエイリアル4000による筋肉調整など」[現代思想 vol.14, no.5]によって誕生したと聞かされると、人間の投企の達成に共感するよりむしろ（あるいはそれと同時に）、何かしら不健康な匂いを嗅ぎ取らざるをえないのだ。

とはいえ、こうした身体への文化的介入に対する警戒心には、正当な存在理由がないわけではない。なにしろ、国家主義や商業主義によって強いられるドーピングには、ブルジョワ的個人主義やリベラリズムはほとんど無力であって、自然主義的

な信仰こそが、抵抗の力となってきたのだから。特に、父母に授かった身体を「あえて毀傷せず」という精神でこの問題に対抗してきたわれわれ日本人には、ドーピングがアンフェアであることよりも、それが“不自然である”ことのほうが致命的なのである。

だが、こうした価値判断が、なにより無辜な自然の権威をおしいただいているからといって、その無制限の適用が許されるものではなかろう。なにより、われわれが、「私たちの文化が喪ったらしいなものかの幻影にひたりきっている自然こそ、まさにおのれに欠けているものとして、わたしたちの文化がみずから演出し、流通させているものにほかならない」[リオタール]ことを知る限り、また、「社会的差異を宇宙的秩序の中に刻み込むことによって、自然化しつつ正統化しようとする」[ブルデュー]イデオロギーの存在を知る限り、自然の道徳性の濫用をみすごすわけにはいかない。実際、先に述べた“父母に授かった身体”という表現が、別の文脈では、再生のレトリックによって、いかに性的に抑圧的になりうるかは、多くのフェミニストの指摘するところでもある。そして、まさにドーピング問題をめぐるディスコースにおいても、その様々な行使に比べて、女性に対する男性ホルモンの投与が批判される頻度が著しく高いことに気づかずにはいられない。

われわれは、「恵みの大地」といった表現において、自然の再生産力を称賛するのだが、こうしたレトリックは、人間中心主義の視点から、自然の搾取を正当化するものでもある。われわれ日本人は、しばしば、農村の豊かさをもって自然の徳としてきた。しかし、狩猟採集を生業とするアメリカン・ネイティブたちによれば、耕作ほど自然に反したものはない。彼らは西欧的エコロジストのように、生命を階層化しはしない。人間に類似した脳をもつことを理由に、ある種の哺乳類をヒステリックに擁護したり、ヴェジタリアンであることを理由に、自らの無辜を誇ったりはしない。つまり、再びレヴィ＝ストロースを引用すれば、「インディアンは花を摘まない」のである。一方、われわれはといえば、自然の搾取だけに飽き足らず、そのレトリックでもって、同類の搾取にまで乗り出している。自然と女性の隠喩的連合は、文化／自然のコードを、男性／女性のコードと共鳴させることによって、性差にもとづく抑圧を隠蔽してしまう。そうして、人間中心主義の傲慢な理性は、あらゆる社会的ヒエラルヒーを自然化してしまうのだ。

ここ百年ほどの間、資本主義を支えてきた再生産のレトリックは、人間や社会を有機体として語ってきた。そうすることで、それは、身体や社会の“自然さ”に、様々の不平等を隠蔽してきたのだ。だとしたら、このレトリックに対抗するため、ダナ・ハラウェイと共に、機械論的身体観を“再生”させてみるのも悪くないかもしれない。

「有機体と有機的・全体論的な政治学は、ともに復活のメタファーに依存し、たえず生む性という源泉を要請する。ここで示唆したいのは、サイボーグが生む性以上に再生[re-generation]と関わっており、生殖基盤やほとんどの出産に対して懐疑的であるということだ。」

こう主張するサイボーグ・フェミニズムは、スポーツをめぐるディスコースに対しても、決して無縁のものではない。それは、再生産のレトリックとは違って、身体

に対する文化の介入に積極的な価値を認めている。その視点からすれば、例えば、車椅子マラソンになぜ「健常者」が参加しようとしないうのかといった疑問も、あえて問うてみるができるだろう。実際、「自然さ」というイデオロギーさえ忘れれば、車椅子というアタッチメントをつけてスポーツすることはなんら不思議なことではないのだから。

とはいえ、こうした楽天主義には、ともすれば落とし穴がつきまとう。下手をすれば、それは、サイボーグ化によってすべての人間をノーマライズしようといった、ナチズム的優生学にさえ、すり替えられかねないだろう。だが、スポーツは、アメリカのプロ・バスケットに典型的なように、「常ならぬ」身体こそを活性化することもできるのだ。そして、この「サイボーグ・アスレティックス」の可能性こそが、規範に従うよう強制され、調教されたわれわれの身体を癒してくれるかもしれないものだ。なにしろ、今や、われわれの身体は、もともと無垢なものではなかったことが暴露されてしまったのだから。身体は、人間と社会の起源以前に（あるいはそれと共に）“常に既に”文化によって刻み込まれている。それゆえ、ハラウェイはいう、「わたしたちにしてみても、すでにみな、受けてきた傷は深い。だからこそ、復活 [re-birth] ならぬ再生 [re-generation] を求めるのだ」と。しかし、われわれは、こういいかえることもできる。だからこそ、スポーツというレクリエーション [re-creation] を、それもサイボーグ・アスレティックスを求めるのだ、と。

西山 哲朗 (大阪大学)

「GLOBALIZATIONをめぐって —北米スポーツ社会学会報告—」

ふと気がつく小雨は雪に変わっていた。

思わずコートの手を立、小走りにオタワの街へ向かう。

11月の初旬だというのに、すっかり冬景色である。

中世にタイムスリップしたような風景が目の前に広がる。歴史が街の中にとけ込み、歴史との「共生」を肌で感じることができる。また、街のあちこちの案内板には、必ず英語とフランス語。行き交う人々は、アジア人が目立つ。カナダは人種のモザイクといわれるほど、民族が「共生」しているのである。

こんな背景の街で、1993年の北米スポーツ社会学会は開催された。今年のテーマはこの街にふさわしく「スポーツの政治経済—分割の終焉と共通の発見—」。

「89年現象」。それは1789年のフランス革命に始まった。絶対王政から解放され、民衆の手による政治が始まった年である。その100年後の1889年、パリで第2インターが発足し、帝国主義が世界を席卷し、世界を巻き込む国家間の戦争へと導くことになる。さらに100年後、1989年にベルリンの壁が崩れ、国境という政治経済の壁を覆しつつある。この89年現象が意味するところは一体なんだろうか。それは、新しい世紀を占う序曲ではないだろうか。では、次の世紀の序曲はどんな調べだろうか。

グローバリゼーション (GLOVALIZATION)。どうもこれがその調べらしい。それは、今回の学会でいちばん多く使われた言葉だからである。

この学会が始まる直前、マーストリヒト条約により、欧州連合 (EU) が誕生した。共通の通貨を使用し、12ヶ国、3億5千万の人々が、国境や言語を超えた「欧州市民」になったという報道があった。そして、文化的にも12ヶ国の歴史家が編集した共通教科書「欧州の歴史」を出版している。北米もそれと同じように、経済の国境をなくそうとしている。しかし、パナソニックやコカコーラといった企業は、すでに国境を超えて、世界の何処でも手にすることができる。つまり、経済の世界はボーダレスの時代に入っている。

この経済のグローバリゼーションの一方で、政治的には民族国家の独立や戦争が相次ぎ、カナダでもケベック州が独立するという噂まで流れ、新たな壁を造りつつある。この傾向はスポーツの世界には顕著であり、今回の発表の中では、特にオリンピックとグローバリゼーションの問題を扱ったものが多く、例えば、ハーグリーブスは「旗戦争—カタロニアナショナリズムとバルセロナオリンピック」と題して、カタロニアの旗に注目し、政治や組織のグローバリゼーションの中で、民族の旗と国の旗をめぐっての闘争に、権力の問題を浮き彫りにする。また、ライアンの「コカコーラとオリンピック」は興味深い。リレハンメルにオリンピックがやってきたのではなく、コカコーラと共にアメリカがやってきた。街がコカコーラ一色になっていく様子を100枚にもおよぶスライドと音楽で紹介し、彼自身は民族衣装をつけて、一つの文化を持った街が、一つの企業によってアメリカナイゼーションされていく様を発表したのは非常に分かりやすかった。このように、発表の中には、経済のグローバリゼーションが、スポーツの文化や自然を崩壊していくというものが多かった。いや、グローバリゼーションが進めば進むほど、自分のアイデンティティを文化や民族に求めるのかも知れない。従って、この種の問題は「グローバル・アイデンティティは成立しうるのか」といった仮説の提案のように受け取れた。

このように、必ずしもグローバリゼーションの概念が共通理解されているとは言いがたい。ある時は、モダニズム批判として使われ、ポストモダニズムと関連づけて語られる。つまり、これまでの近代化の中でスポーツという文化が世界的に広がってはきたが、その文化は、例えば競争といった一元的な価値を世界的に流布しただけで、文化のもつ多様性を語ってはこなかった。いわゆるポストモダンでは、文化の多様性をどのように理解し、融合していくかという所に力点が置かれるべきであると言われている。従って、多様なスポーツ文化を包み込む共生のシステムの模索こそ必要なのではないだろうか。

その意味において、柔道着のカラー化の問題はグローバリゼーションを考える上で非常に興味深い出来事である。つまり、競争を基本とし（その背景にはダーウィニズムがあるのかもしれないが）、勝者を決めることに価値の一元化を図ろうとする近代スポーツと、「自他共栄」を基本とし、他者の存在を敵対するものではなく、融合するものであるという考え方に立つ日本の伝統的スポーツ (?) との拮抗する文化が、何処まで「共生」できるのかという点で注目に値する。それは、イギリスのクリケットにおけるユニフォーム問題とも非常に似通っている。ここにおいても、カラーか白かという論議は不毛であり、それらが共存するシステムを考えた

方が有効である。

また、ナショナリズム、エスニズムとの関連からは、どうしても情報のインターラクションを問題としなければならない。会議の中で、韓国のスポーツのことについて尋ねられても何も答えられない。アジアのスポーツについて何も知らない自分に驚いた。欧米のスポーツについての情報は入ってくるのに、近くの情報が入ってこない。いや入れようとしていない。この情報の偏向が、グローバリゼーションを歪めているのではないだろうか。つまり、情報の価値の一元化が相互作用による新しい価値の創造を阻んでいるといえよう。

このように考えてくると、スポーツだけでは捉えられない問題を多く含んでいる。そこで、北米スポーツ社会学会という名前も「身体文化 (PHYSICAL CULTURE)」という言葉をつけ加えてはどうかという提案が、コークリーからなされた。

このような混沌とした中であって、明るいニュースと言え、日本ではお馴染みのケニヨンが、長年に渡る北米での活躍を讃えて、初めての北米スポーツ社会学会賞を受賞したことである。彼の研究業績はもちろんのこと、ロイに始まり、山口まで、現在のスポーツ社会学で活躍している多くの人材を排出しているのには驚かされる。そう、科学することはグローバリゼーション。壁のない、グローバルな社会は、真実を求めるものの中にこそ存在すると、暮れかけるカナダの大地を自由に飛び回る鷗を見ながらそう思った。

杉本 厚夫 (京都教育大学)

Ⅲ. 国際学会情報

International Committee for the Sociology of Sport (ICSS) Congress
July 18-23, 1994, Bielfeld, Germany - at the occasion of the XⅢ World
Congress of Sociology of the International Sociological Association -
'Contested Boundaries and shifting Solidarities' (各セッションの詳細については、14ページを参照してください。)

Ⅳ. 寄贈図書

以下の年報が当学会あてに届いています。

- ・一橋大学体育共同研究室編集発行：研究年報 1993 スポーツ社会学の新展開

Ⅴ. 会員異動 (1994年2月現在)

<住所変更・所属変更>

氏名	所属	住所
夫 基源	茨城大学	

<新規会員>

安 昌圭	中京大学
遠藤竜馬	大阪大学
河原和枝	大阪大学
佐藤充宏	徳島大学
辻 浅夫	京都外国語大学
伏見勝利	
藤原健固	中京大学
安田国臣	愛知学泉大学
山本学	高知県教育委員会
横井康博	中京大学
劉 樸	中京大学

<訂正>

吉岡清香

【編集後記】

今回は、杉本会員が北米スポーツ社会学会の報告を投稿してくれました。この他にも、日本とアメリカの身体・スポーツそしてサイボーグ的身体といった興味深いエッセイがなっています。私、清水はしばらくヨーロッパに参りますので、この一年は、事務局の松村会員と編集を手伝っていただきました岡田会員を中心に『学会だより』を編集していきます。よろしくお願い申し上げます。

(清水 諭)

Sessions of the ICSS-congress 1994

<p>Session 1: Nationalism, Globalization and Sport: the local versus the global <i>session coordinator:</i> Joseph Maguire Loughborough University Department of Physical Education Sport Science & Recreation Management Loughborough, Leicestershire, LE11 3TU GB - England Tel: 44 509 22 33 28 Fax: 44 509 23 17 76 E-mail: (J.A. Maguire @ lut.ac.uk)</p>	<p>Session 7: Sport and leisure (proposed joint session with research committee nr. 13, sociology of leisure) <i>session coordinator:</i> Gyöngyi Szabo Földesi Magyar Testnevelési Egyetem Hungarian University of Physical Education Alkotás U 44 H - 1123 Budapest Hungary Tel: 00 36 11 56 73 27 Fax: 00 36 11 56 63 37</p>
<p>Session 2: Sport as consumption: continuity or change? <i>session coordinator:</i> Klaus Heinemann Universität Hamburg, Institut für Soziologie Allende Platz 1 D - 2000 Hamburg 13, Germany Tel: 49 4041 23 46 59 Fax: 49 4041 23 45 06</p>	<p>Session 8: Sport biographies (proposed joint session with research committee 38, biography and society) <i>session coordinator:</i> Michèle Métoudi 3 allée Jeanne F - 92 290 Chatenay Malabry, France Tel: see program coordinator Fax: see program coordinator</p>
<p>Session 3: Crossing Boundaries: integration or segregation through sport? <i>session coordinator:</i> John Bale School of Human Development Department of Education, Keele University Keele, Staffordshire ST5 5BG, United Kingdom Tel: 44 782 583 117 Fax: 44 782 714 113</p>	<p>Session 9: Sociology of the body <i>session coordinator:</i> Zbigniew Krawczyk Akademia Wychowania Fizycznego Jozefa Pilsudkiego W Warszawie ul. Marymoncka 34 01 - 813 Warszawa, Poland Tel: 48 22 34 08 13 Fax: 48 22 34 76 65</p>
<p>Session 4: Postmodern societies: figuring out a sporting future <i>session coordinator:</i> John Loy School of Physical Education Union Court Building, University of Otago P.O. Box 56, Dunedin, New Zealand Tel: 64 03 479 83 98 Fax: 64 03 479 83 32 E-mail: (jLoy @ pooka.otago.ac.nz)</p>	<p>Session 10: National sport governance and policy <i>session coordinator:</i> Günther Lüschen Heinrich Heine Universität Universitätsstrasse 1 D - 4000 Düsseldorf, Germany Tel: 49 211 311 52 96 Fax: 49 211 311 51 87</p>
<p>Session 5: Sports tourism and sport events: a global responsibility <i>session coordinator:</i> Klaus Cachay Universität Bielefeld Fakultät für Psychologie und Sportwissenschaft Postfach 100131 33501 Bielefeld, Germany Tel: 49 521 106 00 Fax: 49 421 106 58 44</p>	<p>Session 11: Open papers <i>session coordinator:</i> Toshio Saeki Department of Sport Sociology Institute of Health and Sport Sciences University of Tsukuba Nennodai 1-1-1 Tsukuba, Ibaraki, 305 Japan Tel: 81 298 53 63 71 Fax: 81 298 53 65 07</p>
<p>Session 6: New frontiers in the sociology of sport: gendered emotions, rationalities and sporting bodies <i>session coordinator:</i> Nuria Puig i Barata Universitat de Barcelona, INEF de Catalunya Avgda de l'Estad Anella Olimpica de Montjuic, 08004 Barcelona Tel: 34 93 425 54 45 Fax: 34 93 426 36 17</p>	<p>Session 12: Business meeting <i>session coordinator:</i> Kari Fasting (president of ICSS) Norges Idrettshogskole P.O. Box 40 Kringsja 0807 Oslo 8, Norway Tel: 47 22 18 56 00 Fax: 47 22 23 42 20</p>

